

天声人語

へなかなか人にとあらずは酒壺しやくに成りにてしかも酒に染みなむ。いっそ人間をやめ、ずつと酒に浸れる酒壺になりたい。突拍子もない願望を歌にした人がいたものである。大伴旅人。

奈良の昔、公卿にして一流の教養人だった▼旅人は天平2(730)年春、九州・大宰府の公邸で宴を催している。招かれたのは九州一円の役人や医師、陰陽師ら31人。庭に咲く梅を詠み比べる歌宴だった。「初春の令月れいげつにして、気淑く風和わづかぎ」。旅人の書き残したとされる開宴の辞から採られたのが、新元号「令和」である▼辞には続きがある。「天空を覆いとし、大地を敷物として、くつろぎ、ひざ寄せ合って酒杯を飛ばす。さあ園梅を歌に詠もうではないか」。枝を手折り、雪にたとえ、酒杯に浮かべる公卿らの姿が浮かぶ▼「令和」にどのような感想をお持ちになったろう。令和の字を名に持つ方は、これからしばらく話題に事欠くまい。ここを商機と万葉集コーナーを設けた書店もある。お祭り騒ぎはしばらく続きそうだ▼さて、万葉の昔に戻れば、60余年の大伴旅人の生涯に、元号は驚くほど頻繁に代わっている。やれ吉兆の亀が発見されたと言って「神亀」。奇跡の水が見つかったと「養老」。ほかに「朱鳥」「大宝」「慶雲」「和銅」「靈亀」「天平」。まるで改元のインフレ期のようなのである▼そんな時代を知る旅人だが、酒席で述べた挨拶が1300年後の元号になってしまふとは。二日酔いの夢にも想像しなかったことだろう。